

夏季福音特別集会 第3回

キリストの賜う「祈り」

2019年8月24日（京都KKRくに荘）

奥田昌道

天を裂きてくだり給え 嬰兒に踵し給えり 幼児、乳飲み子の口に力の基を置き給えり 蛇のごとく聴く、鳩のように素直 祈りたることは既になえられたりとせよ 信と誠 愛は常に一緒にいることを願う 我なんじらを選び 御霊の賜う一致 現象面で聴かれる聴かれないを突き抜けた祈り 正気の沙汰を越えた霊気の沙汰 私における神秘的体験 神のためには狂えるなり

●天を裂きてくだり給え

イザヤ書64章を読みます。

「1願くはなんじ天を裂きてくだり給え。なんじのみまえに山々ふるい動かんことを。2火の柴をもやし火の水を沸かすがごとくして降りたまえ。かくて名をなんじの敵にあらわし、もろもろの国をなんじのみまえに戦慄かしまたまえ。3汝われらが逆料あたわざる懼るべき事をおこない給いしときに降りたまえり。山々はその前にふるいうごけり。4上古よりこのかた汝のほか何なる神ありて俟望みたる者にかかる事をおこないしや。

この「俟望む」というのは「全託する」ということ。

いまだ聴かず、いまだ耳にいらす、いまだ目にみしことなし。5汝はよろこびて義をおこない、なんじの途にありてなんじを記念するものを迎えたもう。視よなんじ怒りたまえり。われらは罪をおかせり。かかる状なること既にひさし。我等いかで救わるるを得んや。6我等はみな潔からざる物のごとくなり、われらの義はことごとく汚れたる衣のごとし。我等はみな木葉のごとく枯れ、われらのよこしまは暴風のごとく我らを吹き去れり。7なんじの名をよぶ者なく、みずから励みて汝によりすがる者なし。なんじ顔をおおいてわれらを顧みたまわず、われらが邪曲をもてわれらを消失せしめたまえり。

だから、現状は、全く神さまの民としてふさわしくない、こんな惨憺たるさまである。そういう我々なんだけれども、冒頭にありましたように、

「願くはなんじ天を裂きてくだり給え。なんじのみまえに山々ふるい動かんとを。火の柴をもやし火の水を沸すがごとくして降りたまえ」

と。この「火の柴をもやし」というのは、エリヤがバアルの預言者450人を相手にして、エリヤが祈ったら、火が天から降ってきて、水浸しにしてあるところの柴を燃やしたという故事が列王紀略上（18章）に出てくる。あのように自分たちの現状は、今述べましたように、



実に惨憺たるものですけれども、だからこそ、いよいよあなたが天を裂いて降ってください、あなたの御前に山々が震い動くようにと。モーセが十誠を受けた時に、

「山々が震い動いた。恐ろしくて誰もそこに近づけなかった」

と書いてある。そういうことが使徒行伝の始めの方にも出てきます。そのようにして、

「惨憺たる我々であるからこそ余計に、あなたが天を裂いて降^{くだ}ってください。あなたの御前に山々が震い動きますように。火が柴を燃やして水を沸かしたように、あなたが降ってください。御名を敵に表して諸々の国を震い動かしてください。現状は惨憺たるものであるがゆえに、いよいよ逆に、あなたの出番です。我々は本当にしようもないやつで、何ともなりませんけれども、罪を犯してあなたのお怒りはごもつともです。でも、どうぞ、それを越えて、なお、あなたが降ってください。あなたは我々をもうお捨てになりました。我々は消え失せてしまいました」と。そういうことを言つて、8節、

8 されどエホバよ汝はわれらの父なり。

どんなにこちらがけしからんことを、本当に申し訳ないことをやったにもかかわらず、なお、あなたは私たちの父でいらつしやいます。

われらは泥塊^{つちくれ}にしてなんじは陶工^{すえつくり}なり。

陶工は泥塊をこねまわして、どんな器にも作りあげる。失敗したら、またそれを碎いて、また作り直す。そういうことがエレミヤ記のところにもある。

我らは皆なんじの御手のわざなり。

あなたが我々をお創りになった。出来損ないであつても、また作り直して、素晴らしい器にしてくれるはずですよ。

9 エホバよいたく怒りたもうなかれ、永くよこしまを記念したもうなかれ。

願くは顧みたまえ、我等はみななんじの民なり。¹⁰ 汝のきよき諸邑^{まちまち}は野とな

りシオンは野となりエルサレムは荒れ廃れたり。¹¹ 我らの先祖が汝を讃めた

たえたる我等のきよき宮は火にやかれ、

異民族によつて火で焼かれ、

我等のしたいたる処はことごとく荒れはてたり。

惨憺たるさまです。こういう現実をみて、あなたは黙つていらつしやるんですかと。

¹² エホバよこれらの事あれども汝なおみずから制^{おさ}えたもうや。なんじなお黙^{もだ}

してわれらに深くくるしみを受けしめたもうや。」（イザヤ64・1〜12）

もうここで立ち上がってくださいと言っている。「自分たちが立派だから、やってくれ」と言っているのではない。

「こんな惨憺たるやつです。でも、だからこそ、いよいよあなたの出番です」と。だから、



「天を裂きてくだり給え」

という、この激しい祈りですね。この気魄にやはり私たちはお応えしないといけない。私たちはキリストを、イエスさまという救い主をいただいでしまっている。それにもかかわらず、眠っていたらどうするんだと。

「願くはなんじ天を裂きてくだり給え。なんじのみまえに山々ふるい動かんことを」と。こういう気魄をやはりこのイザヤ書64章から受けとりたいたいなと思いました。それがひとつですね。

● 嬰兒に踵し給えり

皆さんに資料として差し上げたものは、マタイ伝から引きながら、かつこの中でルカ伝とかマルコ伝ではどういうふうになっているかというのをずっとリストアップしたわけです。その中で祈りに関するものを拾いあげますと、マタイ伝5章43〜48節のところの、

「天の父の全まきが如く全かれ」

と言われて、その次に6章5〜8節に、

「祈るとき戸を閉じて汝の父に祈れ」

と、祈りの姿をお示しになった。これが祈りに関するところですよ。

それから次の、6章9〜15節、これは有名な「主の祈り」です。ルカ伝では11章1〜13節。そういうところですね。

それから、7章7〜12節、これは

「求めよ、さらば与えられん」

という。この「求めよ」というのは、「祈り求めよ」でしょ。祈り求めよ、そうすれば与えられると。

それから、8章23〜27節、

「イエス、眠り居たもう」

と。これはただ眠っておられるのではない。父なる神のみふところの中で祈っていていらつしやる。眠っていても祈っておられる。そういう姿ではないかと思う。そういうのが、この私のリストの中から拾えば出てきます。

それから、マタイ伝11章25〜30節、「イエスの祈りと天よりの応答」と書いてます。マタイ伝11章25節、

「²⁵その時イエス答えて言いたもう」

と、こう出てくる。「その時」とは何か。その前を開きますと、イエスが一生懸命に伝道なされた。それでも全然、それに人々は耳を傾けなかった。悔い改めもしなかった。それでイエスはがっかりなさっているんですね。20節から、

「²⁰爰こゝにイエス多くの能力ちからある業わざを行い給える町々の悔改めぬによりて、之を



責めはじめ給う。21 『禍害なる哉コラジンよ、禍害なる哉ベツサイダよ、汝らの中にて行いたる能力ある業を、ツロとシドンとにて行いしならば、彼らは早く荒布を著、灰の中にて悔改めしならん。22 されば汝らに告ぐ、審判の日にはツロとシドンとのかた汝等よりも耐え易からん。』

つまり、イエスの伝道に耳をかきさなかつた、そういうお前たち——昔の旧約の時代ではない、今、神さまから遣わされた私が真剣に御国のことを語っているのに、それに対して背を向け、あるいは足蹴にしている——そんな者はあのツロ・シドンよりもっと酷い審きにあつて然るべきだと。カペナウムは非常に信仰深い所とされていたんでしよう。

23 カペナウムよ、なんじは天にまで挙げらるべきか、黄泉にまで下らん。汝のうちにて行いたる能力ある業を、ソドムにて行いしならば、今日までもかの町は遺りしならん。24 されば汝らに告ぐ、審判の日にはソドムの地のかた汝よりも耐え易からん』

だから、審判の時にはあのソドムとゴモラよりも、お前たちカペナウムの方がもっと酷い審きにあうはずだと。まあイエスはここでブツブツ、ブツブツ文句を言い出したわけですよ。今の我々の言葉でいえば、

「骨折り損のくたびれもうけ。もう俺は嫌だよ、伝道は」と、そういう気持ちだと私は推し量るわけです。それに対して、

「まあ、そんなに怒るなよ。わしが今もお前の味方だよ」

という、慰めの御声が聞こえてきたんです。だから、

「25 その時イエス答えて言いたもう」

と。それで、小池先生は、

「何に對して、答えたんですかね？」

と言われた。私は、はつとした。あ、そうだ。「答えて言いたもう」というからには何か慰めか、何かの御声があつたにちがいないと。イエスは、ブツブツ文句を言っているわけですよ。それに対して、

25 その時イエス答えて言いたもう 『天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを智き者、慧き者にかくして嬰兒に顕し給えり。26 父よ、然り、斯の如きは御意に適えるなり。』（マタイ11・20〜26）

と。そうだったんです。

「**幼児、嬰兒**、そういう魂こそ、あなたは祝福し、あなたがいろんな恵みを賜う本命です。あの知恵ある者、力ある者、そんな者をあなたは相手になさらないはずですよ」

と言って、非常に慰め深い言葉がイエスの上に臨んできた。その慰めの言葉に対して、「そうでした。わかりました」



と、いつて、お応えになつてゐる祈りの言葉なんです、これ。

「**天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを智き者、慧き者にかくして**
嬰兒に躡し給えり。」²⁶父よ、然り、**斯の如きは御意に適えるなり。**」

と。だから、皆さん、この世の文化人やこの世の賢い人たちが何を言おうと、どんなにボロクソに言おうと、そんなものは相手になさらないで、

「我々には主キリストさまが付いている。主キリストを遣わされた父なる神さまが付いている」

と。父なる神さまに、キリストに祝福されるのがどういう者か、ここにちゃんとキリストは言つておられる。智き者、慧き者にかくして**嬰兒に躡して**くださつてゐると。

● 幼児、乳飲み子の口に力の基を置き給えり

キリストは**幼児を大事**になさいました。我々は主の幼児、**嬰兒**でいいんです。詩篇の第8篇にもそれが出てきてます。

「われらの主エホバよなんじの名は地にあまねくして尊きかな、その栄光を天におきたまえり。²なんじは**嬰兒**ちのみごの口により力の基をおきて敵にそなえたまえり。こは**仇人**とうらみを報るものを鎮静めんがためなり」(詩篇8・1〜2)

乳飲み子、**嬰兒**に何ができるんですか。何もできないでしょ。

今日も、**衡平君**が来ました。あの子は自分で何もできません。本当に何もできません。けれども、私はあの**衡平君**の上に主の祝福がいっぱい注がれている、あふれるばかりに主の顧み、恵み、愛が注がれている。そのように信じております。それと、

「**嬰兒**ちのみごの口に力の基をおいて敵にそなえてくださつてゐる。こは神に逆らう**仇人**、うらみをもつて報ゆるものを鎮圧するものである」

と。だから、

「われ弱きときに強し」

と、パウロも言つてます。我々は自分で力が強くある必要はない。全く無力でいいんです。キリストは無力者であった。この無力であるキリストに神の力が充満したから、あのような素晴らしい御業が起こつた。キリストは決して、

「私は力あるものだ」

と仰つてゐない。

「私は自分から何もできない。何も言えない。私はからつぽだ」

と。キリストは、**神さま**のことを何と言つておられるか。

「**私を遣わしたもうた父**」

と、いつもその言葉が付いている。



「私は自分で勝手にやって来たのではない。お遣わしになった方がいらつしやる。そのお方の御意だけを私は求めている」

そういうことをヨハネ伝の中でさんざん言っておられる。

「我を遣わし給いし父、そのお方があなた方を引つ張りこんで引き寄せてくださらなかつたら、誰も父の御許に行けない。すべては父の御業である」

と、そういうことをヨハネ伝で繰り返して言っておられる。ここが同じように、

「あなたは嬰兒、乳飲み子の口により、そこに力の基を置いて敵に備えたまえり」

という言葉が出てくる。こういうところに、どうぞ、注目していただきたいと思えます。

詩篇でもさかんに、「嬰兒」「乳飲み子」とか「寡婦」、そういつたいわばこの世から顧みられないような人に対する憐れみ、愛、祈り、それが所々に出てきてます。そういう人たちを顧みる者は幸いである。病める者を顧みる者は幸いであると。そういう詩篇がありますから、そんなものにも注目していただきたい。

この詩篇は、ついでながら、

³我なんじの指のわざなる天を觀、なんじの設けたまえる月と星とをみるに、私はよく夜、衡平君を訪ねて行って、そして出るとだいたい9時頃か10時頃になる。空を見上げると、8月といえども中秋の満月も勝るとも劣らないくらいに輝いている。

「月天心貧しき町を通りけり」(与謝蕪村)

という句がありますが、ああいう感じを、あの東三本木通りをわずか25メートルほど歩きながら、思うんです。

「ああそうだ、これが詩篇の世界だ。これがキリストの喜びたもう光景だ」

と思つて、そして私の家にたどり着くという、そういうときを時々過ごすんですよ。だから、皆さんも、氣宇壮大に、天を相手に、太陽を月を星を相手にして神讚美する。詩篇148篇くらいからあと全部それですよ。

「山よ、岩よ、叫べよ。共に神を讚美しよう」

という、讚美に溢れています。そういうのが、この8篇にも出ているわけです。

³我なんじの指のわざなる天を觀、なんじの設けたまえる月と星とをみるに、

⁴世人はいかなるものなればこれを聖念にとめたもうや。

あの雄大なる大自然、宇宙、それに比べて人間とはなんとちつぽつぽつな存在なんでしょうか。このちつぽつぽつな存在にあなたは御意をとめてくださっている。「吹けば飛ぶよな将棋の駒に」なんていう——「王将」の歌詞かな——言葉がありますが、まさに吹けば飛ぶよな、塵にも等しい存在をあなたは重んじて、そのために御子を降して、私たちに永遠の生命を一人ひとりに無条件に賜う。なんと素晴らしいことでしょうか。そういう思いで、この詩篇を読んでいただきたい。



人の子はいかなるものなればこれを顧みたまうや。⁵只すこしく人を神よりも卑ひくくつくりて榮さかえと尊貴とつとぎとをかうぶらせ。⁶またこれに手のわざを治めしめ万よろずのもの物をその足下あしもとにおきたまえり。⁷すべての羊うしまた野の獣、⁸そらの鳥うみの魚もろもろの海路うみじをかようものをまで皆しかなせり。

クジラなんか入っているかもしれません、いろんな動物が、お魚があります。その全部の人間はキャプテンだと。そういったあらゆる動物たちをコントロールして導いて守っている、そういういわば仲間たちの中のリーダーとして人間をお用いくださっている。

⁹われらの主エホバよ、なんじの名は地にあまねくして尊きかな」(詩篇8・1
59)

だから、

「それに相応ふさわしくお前たちは歩むんだよ」という。決して、

「自然を征服する」

とか、そんな思想は全然ないですよ、旧約聖書のこの詩篇また新約聖書も。ああいう「自然を征服する」なんていうのは、勝手にヨーロッパの誰かしらんけれども作りあげた思想であって、それを「キリスト教は」と一般化するのとはとんでもない誤りであるということ。私には常々感じ、また機会があれば、これまでも叫んできた。

この詩篇の中をみても、本当に天然自然と一つになっている。神讚美している。そういう心は我々に非常に近い。そのことを、どうぞ皆さんも、心にとめていただきたいなと、そんな思いがいたします。

「幼児、乳飲み子の口に力の基を置いて、敵に備え給えり」と、こういうことをひとつ申し上げたかった。

●蛇のごとく聴く、鳩のように素直

それから、祈りのことに関して、マタイ伝17章1節から、山上の変貌のところ。祈ろうとして山に登られた。祈っている間にイエスの状さまが変貌した。そして、モーセとエリヤが現れたというあの場面です。あれは、

「祈ろうとして山に登り、祈っておられる間にその状さま変わり」

と書いてありますから、いかにイエスというお方が大事な局面では常に祈っておられるかということがわかります。

それから、マタイ伝18章19節から20節のところ、

「¹⁹また誠に汝らに告ぐ、もし汝等のうち二人、何にても求むる事につき地にて心を一つにせば、天にいます我が父は之を成し給うべし。」

求むる事についてこの地上で心を一つにするなら、そこから祈りが出てくるはず。心



を一つしてそのことを祈る。そうすると、神は聞いてくださる。天の父はこれを成し給うべしと。

20 二、三人わが名によりて集る所には、我もその中に在るなり」(マタイ18・19)

かつていろんな夏の特別集会なんかで、小池先生が遠方でなさる。私は宿に着きますと、その時、私がいちばん願ったのは、まず宿に着いたら祈るといふことなんです。

「主さま、ここまで連れて来てくださって、ありがとうございます。これからもまた、祈りの集会をよろしくお願いいたします」

と、それを一番にやりたかった。でも、なかなか皆それに賛同してくれなかったようで、実現はしませんでした。私の思いは旅で目的地に着いたらまず感謝する。それを思います。

それから、マタイ伝21章12〜17節(マルコ11・15〜18、ルカ19・45〜46)。

「わが家は祈の家と称えらるべし」

それが強盗の巣にしてしまっている、そこでけしからん商売をやっている。それで、イエスは暴力をふるわれまして、蹴散らして、

「神を思う熱心、われを食いつぶせり」

というような、そういう詩篇の言葉を引用されていましたけれども、そのようにイエスの熱心というのは、神さまゆえに、あそこでは本当に怒りを爆発された。敵どもは、

「お前はいったい何の権威をもってそんなことをやるんだ」

と、詰め寄ってきた。それで、イエスは、

「私の方も聞きたいことがある。ヨハネのバプテスマは人から出たのか、天か

ら出たのか」

と。それに対して彼らは答えなかった。「人から」と言ったら、民衆がゆるさん。「天から」と言ったら、「なぜ、ヨハネを大事にしなかったか」とまた責められる。だから、

「いや、答えられない」

と。そしたら、イエスも、

「私も答えない」

と。私は、イエスは賢いと思う。簡単に敵の誘いにのったり、術中にはまらない。畏に引つかからない。ちゃんと防御して、うまくそこをすり抜けておられます。無駄死なさない。時がくるまでは、ちゃんとご自分の命を守っておられる。だから、イエスは、

「あなた方は蛇のごとく聴く、鳩のように素直なれ」

と。蛇の方が先に出てくるでしょ。この世は、蛇のごとく聴くなかったら大変なんですよ。クリスチャンなんて一番だまされやすい。そうでしょ。だから、蛇のごとく聴く、そして鳩のように素直にという。神さまに対しては、鳩のように素直。しかし、この世の悪者どもに対しては、蛇のごとく賢い目を持ってよという。私なんか一番だまされやすい人間です。



今までも何度もそういう目に合ってきてますから、余計なんですけれどもね(笑)。キリストというのは本当に世渡りが上手ですよ、

「税金を納めなければいけませんか？」

と言われたら、

「デナリを見せてごらん。これは誰の肖像か？」

「カエサルです」

「カエサルのものはカエサルに。神のものは神に」

と、ああいう答えがパツと出てくるというのは、

それから、姦淫の現場で捕まえられた女が、

「モーセは、姦淫の現場で捕まえたら石打ちにしろ、と言っている。イエスさ

ま、あなたはどうかしますか？」

と。もし、

「ゆるしてやれ」

と言われたら、

「モーセに逆らっている」

と言う。もし反対に、

「石で打て」

と言ったら、

「愛を説くイエスが目の前でその女の人を殺している」

と言う。どっちにいつてもダメ。イエスはどうかしたか。しゃがみこんで、地面に何かものを書いている。

「はよう、答えろよ、お前」

と言って、ワーワー言ってきたら、すくつと立ち上がって、

「お前たちの中で罪なきものが先ず石をとれ」

と言って、またしゃがみこむ。そしたら、年寄りから順番に去って行ったという。人間は歳を重ねることは、罪をそれだけ重ねるということだから、年寄りから順番に去って行って、あとその女性とイエスしか残らなかった。イエスは、すくつと立ち上がって、周りを見回して、

「女よ、あんたを責めていた者たちはどこへ行ったのか。責める者は誰もいな

いのか？」

「はい、誰もごさいません」

「私も、あなたを罪しない。罰しない。もう重ねて罪を犯さないように」

と。あれはもう涙がでますね、ああいう場面は。

それで、その責任は全部、自分が十字架で背負われた。イエスがゆるされた数だけ、十



十字架で全部、自分が引き受けておられるんです。人をゆるして、自分が傷つかなかったら、こんな楽なことはないですよ。そうでしょ。

けれども、イエスは御業をなさることに、そのつけは全部、自分が背負いこんで、そして十字架で片づけておられる。そういうことを思えば、このキリストさまの前に、十字架のましまの前に、こうべを垂れるのが人間として当たり前だと私は思う。

そういう心を持たなかったら、「ひとでなし」というんです。ところが、文化人には「ひとでなし」がたくさんおる。いつも言いますように。というのは、私も文化人のはしくれに入れてしまわれておるものですから、余計そう思うんですよ。文化人が本当にキリストの前に平伏して、

「主は素晴らしい、キリストは素晴らしい！」

と、本気で叫んでくれたら、日本は変わると思うんです、本当のところ。それを言ってくれないもの。神学者たちは聖書に精通しているけれども、言ってくれない。自分が傷ついて、本当に日本を霊的にひっくり返そうという、そんな叫びを発してくれない。私はくやしいんですよ。だから、

「この輩ともがらもだせば、石叫ぶべし」

と、キリストは言われた。そのように、皆さんが本当に叫んでほしいんです。それがさっきの詩篇8篇の、

「幼児、嬰兒に力の基を置いて、敵に備え給えり」

と、それにも通じると思いますしね。まあそんなことを思うんです。ああ、どうも熱してしまいますね、いけません。

●祈りたることは既にかえられたりませよ

マタイ伝21章18〜22節、

「祈りのとき、何にても信じて求めば、何でも得べし」

これも素晴らしいですね。だから、キリストは、

「祈りたることは既に得たりとせよ」

と言われた。

自然科学の世界は実験をします。データが出てきます。それで、「ああ、これでよかった」というふうに、何事も実験して試して、それが重なって揺るぎないものになったときに、それを真理として認める。ところが、福音の世界は逆なんです。御言に信じて、それによりかかって歩きだすと、それが実現していく。これを忘れないでください。

「汝の罪、ゆるされたり」

「はい、ありがとうございます」

と。そう言って動きだす。あの十人の癩病人が癒されたときにも、イエスは、



「行って、祭司たちに体を見せて来なさい」
と、それだけしか言われなかった。

「はい、わかりました」
と言って、みんな十人が歩きだして、だんだん潔められてきた。そのことに気づいた一人
が帰ってきて、

「イエスキさま、私は潔められました」

「そうか、よかったね。さあ、はやく祭司のところへ行つて」
と、きつと仰ったと思う。そして、何と仰ったか、

「十人がみな潔められたんだろ。帰ってきたのは、ただお前だけかね」

と、イエスは言っておられる。恵みを恵みとして受けたときに、直ちに感謝して、それに
対する祈りを捧げる。その気持ちがあつたら、御利益だけで、

「ありがとうございます。助かりました。これから散々悪いことをしますから」
と(笑)。そういうふうな御利益をただ受けて、喜んでいるのでは絶対に霊的な進歩はあり
ません。そういうことも思います。

私はこのリストの中で、

「祈りのとき、何にても信じて求めば、ことごとく得べし」

というところに、マルコ伝を2か所(11・12〜14、11・20〜26)、ルカ伝(17・5〜6)を引い
てます。それからおまけに、ヨハネ第一の手紙も引いています。

ヨハネ第一の手紙5章の14〜15節。

「あなた方はもう既に神の子だ。もの凄く神さまから愛されているんだ」

と。さんざんそのことを語ってきました、5章ではたとえば、

「4 おおよそ神より生るる者は世に勝つ、世に勝つ勝利は我らの信仰なり。 5

世に勝つものは誰ぞ、イエスを神の子と信する者にあらずや。

と、そういうことを言つて、それから、

11 その証あかしはこれなり、神は永遠の生命を我らに賜えり、この生命はその子に

あり。12 御子をもつ者は生命をもち、神の子をもたぬ者は生命をもたず。

と。そうなんです。生命をもつておられるのは御子キリストだけです。その方をもた
ないで、自分の中に生命をプロデュースはできません。生命はいただくものです。その生
命を下さるお方がキリストさまなんです。そして、あなた方は既に御子を信じている。

13 われ神の子の名を信する汝らに此等のことを書き贈るは、汝らに自ら永遠
の生命を有つことを知らしめん為なり。

再確認させるためだ。あなた方は既に永遠の生命を持っている、そのことをハッキリと
受けとつていただきたいためだ。そして、

14 我らが神に向いて確信する所は是なり、即ち御意にかなう事を求めば、必



ず聴き給う。

御意にかなう事を求めていけば、必ず聴いてくださる。何でも聴いてくださるということがわかつているなら、

15 かく求むるところ、何事にも聴き給うと知れば、求めし願を得たる事も知るなり。」（ヨハネ15・4〜15）

「求めた願いはもう得たる事をも知るなり」ということ。祈ってそれが実現して、

「あ、やつぱり聴いてもらった」

と、そうじゃないんだと。もう祈ったら、既にその時点でもう聴き届けられている。それが現実的に現れてくるのは、先かもわからない。その瞬間かもわからないし、何年後かもわからない。そんなことはどうでもいい。

「祈りたることは既になえられたりませよ」

と。これが信仰の事態なんです。この世はすべて見て確かめて、それから、

「あつ、やつぱりそうだった。まちがいはなかった」

と。これがこの世の論理ですけども。キリストの僕たちにとっては、

「祈りたることは既になえられたりませよ」

と。そうやっていく。

「では、何でもいいんですか？」

「何でも祈れ」

「勝手なことを祈ってもいいんですか？」

「キリストの弟子が、勝手なことを祈るはずがない」

と。それがヨハネ伝の14章から16章。これは遺言なんです。弟子たちと別れに際して、

「これだけのことはお前たちに言っておきたい」

と、それを仰ったのがまとまって、ここに書かれている。

●信と誠

しかも、ヨハネ伝13章の終わりのところで、

「³⁴われ新しき誠命を汝らに与う、なんじら相愛すべし。わが汝らを愛せしごとく、汝らも相愛すべし。³⁵互に相愛する事をせば、之によりて人みな汝らの我が弟子たるを知らん」」（ヨハネ13・34〜35）

新しき誠命をあなた方に与える。あなた方は互いに愛しあいなさい。その愛しあっている

姿によって本当にあなた方が私の弟子だということを世間は認識するんだからと。そういうことをちゃんと仰った。それからまた14章から改めて16章にかけて遺言のようなことを仰っている。だから、皆さん、この14章から16章をしっかりと読んで、それを祈りのベースにして、



「あなたはヨハネ伝でこんなふうにも私どもに約束をくださいました。その約束の御言に基づいて私はお祈りいたします。どうぞ、この祈りを成就してください」

と。祈りというのは、自分勝手な願いを申し上げることではない。御言を抛り所として、

「あなたの御言はこうです。その御言に従って、私はお願いいたします」

と。こう言ったら、神さまの方も否定できないでしょ。自分が与えた言葉、それを抛り所にして願い事をもつてくると、

「ああ、やっぱり聴いてやらんといかんな」

ということになりますよね。それでなかったら、

「はなしが違うではないですか。あなたの言葉は口先だけなんですか」

と、そうなりますね。だからやはり、言葉というのは大事でしょ。

言葉というものは大事です。だいたい、「信仰」の「信」という字は、人偏に言と書く。人と言をくつつけているのが「信」ですものね。それから、「誠」というのは、言偏に成ると書く。言通りに成っていく。その人は信頼してよろしい。誠なる人である。人と言が一致している人、これは信じてよろしい、まっとうな人である。

漢字というのはそういうふうに出来上がっている。中国の人が本当にそう言っているかどうかは知りませんよ。けれども、出来上がっている言葉が、人と言がくつついているのが、信頼できる人だ、信頼できる言、事柄だよと。それから、言と成がくつついている。言葉通りに成る。そういう人は誠の人だ、信頼に価するよと。

だから、お名前で、「信」という名前がついたり、「誠」という名前が付いている人は、親御さんはそういう思いを込めて付けられたので、例えば、「誠一」という方が時々いらつやいます。その名前にふさわしくなかつたら、ちよつと困りますものね。

「あなたは誠一さんでしょ、誠一筋のお方でしょ。全然違うじゃないですか」

なんていうことになりますし。「信一」なんてありますね。

「信一筋のお方ではありませんか。あなたのやっていること、言っていることは、ちよつと名前にふさわしくないですね」

なんて言つてね、まあそういうふうにして。

いや、親御さんは名前を付けるときに、やはり願いを込めて付けているんです。私は親父さんからあまりいろんないいことをしてもらった覚えはないけれども、どうも、名前はいいらしいんですよ、「昌道」というのは。日を二つ書く、昌という。さかんなるかなという。「道」は、「我は道なり、真理なり、生命なり」のキリスト道でしょ。だから、昌なる道。キリストに在つて昌える道。

「ああこれはありがたい。父親が私にしてくれた唯一のよいことです」
なんて言つたら、父親は怒りますよね（笑）。

「唯一ではないよ、もつとたくさんあるよ」



「はい、わかりました」
と。でもね、お子さまにお名前をつけるときは、みんないろんな願いをこめて、お名前をお付けになっている。だから、その名前を大切にする。まあそんなことを思います。どうも脱線が多くてこまるね。

●愛は常に一緒にいることを願う

ヨハネ伝14章。我々は心が騒ぎます。何かあれば騒ぎます。雷が鳴れば、
「ああえらいこつちゃ」

と。地震が起きれば、「えらいこつちゃ」。暴風雨がやってくる、戦争が起きる、「えらいこつちゃ」と。もう常に「えらいこつちゃ」が起こりがちなんです。それに対して、

「『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。』

なんと力強い言葉か。心騒がざるを得ないような者に向かつて、

「心騒がせないでいいんだ。私がついている。私がいるから大丈夫だよ。神を信じ、また我を信ぜよ」

と。「我を信じ、神を信ぜよ」とは仰らなかつた。まず、神さまを出してきて、

「神を信じ、そして神がお遣いくださっている私を信じなさい」

と。そして、あなた方と常に一緒にいたいんだ。処の備えに往く。処の用意ができたなら、また帰ってきて、あなた方を迎える。そして常にあなた方と一緒にいたいと。

われ汝等のために処を備えに往く。もし往きて汝らの為に処を備えば、復

きたりて汝らを我がもとに迎えん、わが居るところに汝らも居らん為なり。

愛というものは、常に一緒にいるということをお願いではないでしょうか。いつまでも共にありたいと。

私は衡平君とはいつまでも共にありたい。本当にその願いは強い。たびたび申しませんが。やはり、愛する者と常に、この世を去つても、向こうでもなお永遠にというのが、私は愛だと思っています。そういう愛で結ばれているものは、地上を越えて永遠の絆で結ばれていくと、そう私は信じております。決して地上だけでは終わらない。
キリストはそのようにして、

「わが居るところに汝らも居らん為なり」

と。そして、

6 イエス彼に言い給う『われは道なり、真理なり、生命なり、我に由らでは
誰にても父の御許にいたる者なし。』

私を通れば必ず父の御許に、永遠の世界に行けるんだ。私を通らないと誰も行くことができなからねと。その通りです。それから、お別れに際して、ピリポが、

「神さまを示してよね。そしたら、いいわ、きつきつと行ってちようだい」



と（笑）。そこまで言っていないけれどもね。

8.ピリピ言う『主よ、父を我らに示し給え、さらば足れり』
と、こう言ってみよう。

「最後の望みは、神さまを見せてもらおうことですわ」

「えっ？ 私と一緒にいて、見えてないの？ 見える私（イエス・キリスト）の奥に見えない神さまがいらつしやるのが、お前は見えてないのか。それは残念だよ」

10 我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等という言は、己によりて語るにあらず、父われに在して御業をおこない給うなり。

「私の言すらも、私イエスの肉の言ではない、霊の言である」

と。口に発しては、そういった御言となつてあらわれる。手を通して働けば、御業となつて按手の癒しとか、いろんな御業が起こる。これはイエスは神さまに全部、自分をあずけて、あずけっぱなしで、イエスというお方の中に神さまが100%入りこんで、縦横無尽に御業をなさっている。だから、キリストは無責任なんです。

「私は自分から何も言っていないよ。自分から何もしていないよ」

と。ヨハネ伝4章と5章です。あのあたりで言っておられる。

11 わが言うことを信ぜよ、我は父にあり、父は我に居給うなり。

私の業そのものがそれを躓しているではないかと。しかも、

我を信する者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、

と、ここまで言っておられる。我々クリスチャンというのは、そのようにキリストさまがピタッとくっついてくださっている。そして、御業を展開しようとなさっている。それに対して、我々は、

「いや、私はこういうことがあるので、まだできません。いや、私はこうです」
なんて、神さまの御業を制限する。自分の側の限界をもってストップをかける。これがいちばん申し訳ないことなんです。

「縦横無尽にお使い下さい。火の中、水の中、どこへでも私を送りこんで下さい」と言わなくては。イザヤ書43章の中に、

「たとえ火の中を行つても、あなたは燃やされることがない。水の中を行つても、水があなたを蔽つて溺れさすことはない。必ず守られる」（イザヤ43・2）

ということが出てきます。そういうことを我々は、本当に実生活の中でハッキリ、確信をもつて受けとめていくということが大事ですね。

13 汝らが我が名によりて願うことは、我みな之を為さん、父、子によりて栄光を受け給わんためなり。14 何事にても我が名によりて我に願わば、我これを成すべし。

私の名前で祈ることは全部、私がしてあげるから。それが父の栄光になると。そして、



16 われ父に請わん、父は他に助主をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。17 これは真理の御霊なり、

助け主、聖霊、真理の御霊を与えるから、と言われます。

18 我なんじらを遺して孤児とはせず、汝らに来るなり。19 暫くせば世は復われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば汝らも活くべければなり。

復活のキリスト、更にはペンテコステにおいて降つてこられる御霊のキリスト、このお方と一緒にいるんだからと。

20 その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを

汝ら知らん。

これから起こることをちゃんと預言しておられる。それがあのペンテコステを通して全部成ったんです。だから、我々の今日、

「はい、イエスさま、あなたが別れに際して弟子たちに宣言された預言は全部、成就しました。ありがとうございます」

と、こういうふう読んでいただきたい。そして、

21 わが誠命を保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者なり。

キリストの言を守る者、それが私を愛することなんだと。感情的に、「イエスさま、大好き、チュー」なんて（笑）、そういうのではない。「御言を守る」これがいちばん大事なことだと。それが、

「お互いに愛しあいなさい」

という御言だという。

「汝ら相愛すべし」

と。それがキリストの我々に願っておられることなんです。

23 イエス答えて言い給う『人もし我を愛せば、わが言を守る。わが父これを

愛し、かつ我等その許に來りて住処を之とともにせん。24 我を愛せぬ者は、

わが言を守らず。

そういうことを言われる。それから、助け主、聖霊をやがて与えるからと。

26 助け主すなわちわが名によりて父の遣したもう聖霊、汝らに万の事をおしえ、

又すべて我が汝らに言いしことを思い出さしむべし。」（ヨハネ14・1〜26）

弟子たちがどんなに素晴らしい弟子たちであろうと、この福音書に書かれていることを全部、ことごとく自分の記憶力だけで復元できると思わない。遠くに消え去ったような記憶も全部、助け主、聖霊が弟子たちに宿って、そしてそれを復元させてくださった。

パソコンの壊れたのが、復元プログラムで直って、失われたものが全部出てきたという経験を、皆さん、お持ちになっただけじゃあないかもしれない。

そのように、本当はもうとつきの過去に消えてしまったものを全部、現在のように呼び



覚ませて、それを立体化して、そしてあの福音書が出来上がったのではないか、そんな思いがするんです。録音も録画も何もないときですものね。そういうふうにして、あの福音書は書かれたのだらうと思います。全部、聖霊の御業だと、そんなふうに思います。

●我なんじらを選べり

それから、ヨハネ伝15章にいきますと、

「⁵我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。人もし我におり、我また彼におらば、多くの果を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事をも為し能わず。」

「私は葡萄の樹、あなた方は枝だ。葡萄の樹にしっかりと枝がくっついていいるなら、おのずと果を結ぶ。しかし、枝が本体である幹から離れると、何もできないではないか」

と。私たちは、イエス・キリストさまを離れると、何もできない。使いものにならないんですよ、クリスチャンは。というのは、クリスチャンはなまじ良心的に生きているから、この世で社会的に役立たないんですよ。それがキリストに忠実であったら、神さまはその人を用いて、その企業とか何とかにプラスをもたらしてくださるような気がするんです。けれども、彼らがキリストから離れたら、全く使いものにならない。そういうふうに思いますね。そんなことがここに書かれています。

⁶人もし我に居らずば、枝のごとく外に棄てられて枯る、人々これを集め火に投げ入れて焼くなり。⁷汝等もし我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望に随いて求めよ、さらば成らん。

「人われに居らずば、枝のように外に棄てられて枯れてしまう。火に投げ入れて焼かれてしまう。ところが逆に、あなた方が私の中に宿っており、私の言葉があなた方の中に生き活きと生きているなら、何でも望みにしたがって求めてもらい。ことごとく私が成しとげるから」

「祈りたることは叶えられたりとせよ」

という御言の裏付けはこういうところにあると思うんです。だから、条件がある。

「汝れ我が衷にしかと宿りて

祈り求めよ さらば成るべし」(召団讃歌A10「汝れわがうちに」)

という小池先生の讃歌がありますように、キリストの中に私たちがしっかりと、どっぷりと浸りこんで、その中で祈りをいたたく。そしたら、その祈りはエゴから出てない祈りだから、キリストの御意が外へ出てくるような祈りに潔められていきますから、そうすると、それは聴かれていく。そういうことだと思っんですね。

更にいきますと、

¹⁵今よりのち我なんじらを僕といわず、僕は主人のなす事を知らざるなり。



もうあなた方は僕——つまり奴隷です。主人の命令にただ従う。しかも、内容もわからな
いで従う。それが奴隷です——ではない。友だと。友は苦楽を共にする運命共同体だと。

我なんじらを友と呼べり、我が父に聴きし凡てのことを汝らに知らせたれば
なり。16 汝ら我を選びしにあらず、我なんじらを選べり。

あのお魚取りの漁師たちであったペテロ、ヨハネ、ヤコブなんかは宗教的に真つ白だから、
キリストは選んでくださった。キリストがトレーニングされた。そして、ペンテコステで
彼らはエルサレムの中心的な役割を果たしていく。パウロは異邦人伝道に遣わされる。そ
ういう神さまのご計画が成つていったと思うんです。そのへんがこの、

「汝ら我を選びしにあらず、我なんじらを選べり」
ということ。

而して汝らの往きて果を結び、且その果の残らんために、又おおよそ我が名
によりて父に求むるものを、父の賜わんために汝らを立てたり。

「その果が結んでいくように、そして父に願ひ求めることはごとごとく成るよ
うに、そういうことのために私はあなた方を選んだ」

と。そういう予告をここで下さっている。それが決してペテロ、ヨハネ、ヤコブたち直弟
子だけでなくて、この御言をいただいている我々一人ひとりに対して、これが言われてい
ると私は受けとつています。

私が自発的にキリストを選んだのではない。キリストがお前を捕まえて、お前が私の名
を呼ばざるを得ないように仕向けたんだと。だから、

「仕掛け人は私だよ。お前に根拠があつたら、もしお前が嫌になったら、それで終
わりだろ。イエス・キリストに根拠があつたら、キリストの御意が変わらないか
ぎり、揺るがないんだよ」

「いや、私みたいやつが……」

「そんなことを言うな。十字架で全部、お前のマイナスは消されている。『われ主
と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず』と。十字架で既に死にた
る者がなぜ過去にこだわるか。新しい生命を与えたではないか。それは神さまに
献げた生命だ。そこに神の栄光が顕れるんだ。それでこそ本当のわが僕だ」

「はい、ありがとうございます。私はあなたの十字架の御血潮、あなたの十字架の死、
それを決して無駄にしたくはありません。私は自分をあなたにお委ねいたします。

献げていきます。どうぞ、火の中、水の中、どこへでも私をお遣わしく下さい」

という、こういう心意気生まれてくるんです。鎖を付けられて引っ張られて嫌々させら
れる、そんなのではない。自発的にせざるを得ないという、これがパウロの心意気でしょ。
そして、

「人々が救われるためには、私はどんなことでもやる。土下座しろと言われたら、



土下座もするよ。異邦人には異邦人のようになった。律法のある者には律法のある者の姿になった。一人でも多くをキリストに得たいためだ」

と、パウロはコリント書の中で言っている。ああいう姿。水は方円に従うように、まず相手のところまで下りて行つて、相手と同じ姿になつて。しかし、「ミイラ取りがミイラになる」のではない。必ず相手のところに下りて行つて、それをひっくり返して、キリストへ連れてくる。凱旋將軍のように帰つてくる。分捕りものをひつ提げて——桃太郎さんの鬼退治みたいに——分捕りものを持って帰つてくるという、そういうふうな御業、栄光のために私たちが一人ひとりをお用いくださる。全部、キリストの御業である。これが我々の人間としての生きがいではないですか。

この世の栄耀栄華、あるいは名誉、そんなのではないと、あの「キリストには代えられません」という聖歌（521番）があるでしょ。

「キリストには代えられません、世の宝もまた富みも。」

このお方が私に代わつて死んだゆえです。

有名な人になることも、人のほめる言葉もこの心をひきません。

いかに美しいものも、このお方で心が満たされてあるいまは」

と。あの気持ちです。クリスチャンというのは本当にそのようにして、キリストによって旧き自分に死んだ。十字架と一緒に死んだ。新しい生命をいただいた。そして、神さまのご栄光のために生かしていただく、働かしていただく。そして、働き終えたら、向こうで待つていてくれる。

「義の冠、われを待てり」

と、パウロは言いましたね。栄冠が待つている。そういう馳せ場を走つていく。こういうすさまじい御国の戦士として我々をお用いくださっているのが、主イエスさまのご本願です。もう自分の側が、

「いえ、体が弱くて、いや何がどうで、頭がかたくて……」

「そんなことはどうでもええ、わかっているわ、そんなものは。それを承知のうえ

で私はお前に言っているんだよ。責任は私がとるから、私について来なさい」

「はいっ」

と。そこまで言われたら、どうしようもない。

「これが見えないかー」

という、あの水戸黄門さんのあれ（印籠）と同じように、キリストは恵みの力をもって我々をひっくり返して——よく「玉石混淆」というけれども、我々は「玉玉」ですよ——そういうふうな我々を創り変えてくださる。だから、その栄光が天に反射していく。そういうビジョンを、皆さん、持つて進んでいただきたいと思えます。それがこの、

「汝ら我を選びしにあらず、我なんじらを選べり」



ということ。そして、

「豊かに果を結ぶ。あなた方が父に求めることを必ず聴いてくださるように、私はお前たちを立てたんだ」

と。そして目的は、

「あなた方が相愛するためである」

と。いかに弟子どもといえども、お互いにあい愛することが難しいかということを経キリストは充分ご存知で、こういうことを言っておられるように思います。

●御霊の賜う一致

教会が潰れるのは分裂ですよ。サタンは教会に決して不信仰を直接持つてこない。そんなものは、教会ははねつけますから。だから、サタンはまず分裂を引き起こすんです。それで潰れます。分派分裂する。ですから、いかに御霊による一致が大事かということを経ペソ書が言ってます。

「主は一つ、信仰は一つ」

そういう「一つ、一つ」ということをエペソ書が言っているのは、そういうところから来ていると思う。

エペソ書4章、

「¹されば主に在りて囚人たる我なんじらに勧む。汝ら召されたる召に適いて

歩み、²事毎に謙遜と柔和と寛容とを用い、

「謙遜と柔和と寛容」、これは。ピリピ書にも出てきます。

「キリスト・イエスの心を心とせよ」

ということが出てきます。

愛をもて互に忍び、³平和の繋のうちに勉めて御霊の賜う一致を守れ。⁴ 体

は一つ、御霊は一つなり。汝らが召にかかわる一つ望をもて召されたるが如し。

ここに「望」が出てきました。望みも一つ。

⁵主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ、⁶凡ての者の父なる神は一つなり。

神は凡てのものの上に在し、

超在する。万物を超えて在し給う神。それから、

凡てのものを貫き、

貫在の神、貫き浸透してくださる神。それからまた、

凡てのものの中に在したもう。

内に内在したもう神。超在の神、貫在の神、内住の神。これは聖霊です。御霊の主さまはそういうお方である。そしてそれぞれが賜物をいただいているんだと。その賜物は具体的には、



11 彼は或人^{あるひと}を使徒とし、或人を預言者とし、或人を伝道者とし、或人を牧師・教師として与え給えり。

当時はもう教会制度が始まっていたから、そういう者たちにそれぞれ賜物を与えておられる。それはそういう賜物を持ち寄って一つとなる。分裂がない。一つ体を建てあげていく。これが大事だと。

12 これ聖徒を全うして職^{つとめ}を行わせ、キリストの体^{からだ}を建て、13 我等をしてみな信仰と神の子を知る知識とに一致せしめ、全き人、すなわちキリストの満ち足れるほどに至らせ、

キリストは全き人である。キリストが満ち足れるほど、充ち満ちている人が全き人である。そして様々の教えに振り回されない。

14 また我等はもはや幼童^{わらわ}ならず、人の欺騙^{あざむきごと}と誘惑^{まどわし}の術^{てだて}たる悪巧^{わるたくみ}とより起る様々の教^{おしえ}の風に吹きまわされず、15 ただ愛をもて真^{まこと}を保ち、育ちて凡てのこと首なる^{かしら}キリストに達せん為なり。

しつかりとキリストに結ばれていく。

16 彼^{もと}を本とし全身は凡ての節々の助^{たすけ}にて整い、かつ聯^{つらな}り、肢体^{したい}おのおの量^{はかり}に、
応じて働くにより、その体成長し、

人体になぞらえてね。それぞれが役割を果たしていく。そして、

自ら愛によりて建てらるるなり。」(エペソ4・1〜16)

愛によつて建てあげられていく、そういう体あるいは建物、これが信者の集いだ。サタンは、「信仰を棄てろ」なんて絶対^{絶対}に言わない。分裂を引き起こす。そして、教会が崩れていく。ですから、いかにキリストさまご自身も互いの愛ということを強調されたか。

「汝ら互いに相愛せよ。あなた方が愛し合っている姿をもって、初めて世の人は、『あ

あこれぞイエスの弟子だ』ということをちゃんと認めるから」

と、わざわざ言つて、14章から16章でまた重ねて、そういった祈りの共同体であるような姿を論^{さと}しておられます。そういうことをしつかり受けとって、我々はこれを大事にしたいと思えます。

● 現象面で聴かれる聴かれないを突き抜けた祈り

さあ、だいたい私の方で、いわば祈りの誘い水として申し上げるのはそんなことです。これから皆さんと祈りたいんですが、ちよつと補足的に言いますと、さっきのローマ書8章に、

「御霊、言い難き呻^{うめ}きをもて執成^{とりな}し給う」

という言葉がありますね。私たちは、「祈り、祈り」といつても、どう祈っていいかわからない。そういう我々のために、御霊ご自身が言い難い呻きをもって執り成してくださっている。そして、父なる神はそれをちゃんと聴きとどけてくださる。そして、



「神に召されたる者には、一切のことがプラスに働いていく。そのように自分たちは信じている」

ということ、ローマ書8章のところに出てきておりました。それからまた、ルカ伝18章では、「氣落ちせずして絶えず祈るべきこと」と、論しておられます。

それから、使徒行伝でやはり祈りのことが出てくるところを見ますと、ペテロたちが囚われた時に、仲間たちが一生懸命に祈っていた。そしたら、ペテロが救われて帰ってくるという場面があります。そこをちよつと見ておきましょう。ヤコブが殺されて、そしてペテロも殺せんとする、そういうった非常に危機的な状況のところでは、使徒行伝12章。

「その頃ヘロデ王、教会のうちの或人どもを苦しめんとて手を下し、² 剣をもてヨハネの兄弟ヤコブを殺せり。³ この事ユダヤ人の心に適いたるを見て、またペテロをも捕う、頃は除酵祭の時なりき。⁴ すでに執りて獄に入れ、過越の後に民のまえに曳き出さんと心の構にて、四人一組なる四組の兵卒に付して之を守らせたり。⁵ かくてペテロは獄のなかに囚われ、教会は熱心に彼のために神に祈をなせり。

この祈りが聴かれたんですね。

6 ヘロデこれを曳き出さんとする其の前の夜、ペテロは二つの錠にて繋がれ、二人の兵卒のあいだに睡り、番兵らは門口にいて獄を守りたるに、⁷ 視よ、主の使、ペテロの傍らに立ちて、光明室内にかがやく。御使かれの脇をたたき、覚ましていう『疾く起きよ』かくて錠その手より落ちたり。⁸ 御使いう『帯をしめ、靴をはけ』彼その如く為したれば、又いう『上衣をまといて我に従え』

ペテロはまるで夢遊病者のように自分でやっていることがわからないんですよ、言われるとおりにやった。

9 ペテロ出でて随いしが、御使のする事の真なるを知らず、幻影を見るならんと思う。¹⁰ かくて第一・第二の警固を過ぎて

守っていたやつは煙にまかれていたわけですよ。そういう所を突破して行ったわけですよ。

町に入るところの鉄の門に到れば、門おのずから彼等のために開け、相共にいでて一つの街を過ぎしとき、直ちに御使はなれたり。¹¹ ペテロ我に反りて言う『われ今まことに知る、主その使を遣して、ヘロデの手およびユダヤの

民の凡て思い設けし事より、我を救い出し給いしを』

ヤコブが殉教しているんですからね、その次はペテロの番で、明日それが行われるその前夜にこれが起こったという。全くこれは驚くべき奇蹟というよりほかありません。ペテロもそのことに気がついた。

¹² 斯く悟りてマルコと称うるヨハネ



これはマルコ伝を書かされた。マルコがペテロの口述によってマルコ伝を書いた。そのヨハネ・マルコのお母さんのマリヤの所へ行つた。

の母マリヤの家に往きしが、其処には数多あまたのもの集りて祈りいたり。

「どうぞ、ペテロを救い出してください。ヤコブが犠牲になつた。もうヤコブ一人で充分です。どうぞ、ペテロをお救いください」
と、みんなで祈つていたわけです。

13 ペテロ門の戸を叩きたれば、ロダという婢女はしためききに出できたり、14 ペテロの声なるを知りて、歡喜よろこびのあまりに門を開けずして走り入り、ペテロの門の前に立てることを告げれば、15 彼ら『なんじは氣狂えり』と言う。

ロダという女中さんが、

「ペテロさんが帰つてきたよ!」

と。ところが、彼らは

「お前は氣が狂つていのではないか」

と。これですよ。自分らは、「ペテロを救ってください」と、あれだけ祈つていて、そして、女中さんが「ペテロさんが帰つてきた」と言つたら、「お前は氣が狂つたのか」と。なんたることですか。

「ああ、神は我らの祈りを聴いてくださった。ハレルヤ!」

と言つて、全員一斉に飛び出して門へ行く。これであつてほしいんですよ。ところが、「お前、氣狂つたのか」と。これが人間ですわ。

然れどロダは夫それなりと言ひ張る。かれら言う『それはペテロの御使みつかいならん』

つまり、もうペテロは殉教して、御使の姿になつて来た、あるいはペテロを守っている御使さんが来たのかもしれないよと言つた。

16 然るにペテロなお叩きて止やまざれば、かれら門をひらき之を見て驚けり。

それは驚くよな。

17 かれ手を揺うごかして人々を鎮しずめ、主の己ひとを獄とらより導きいだし給たまひしことを具つに語り『これをヤコブと兄弟たちとに告げよ』と言ひて他の処に出で往けり。18 夜明になりて、ペテロは如何にせしとて兵卒の中の騒ひどぎ一方ひとかたならず。

19 ヘロデ之を索もとむれど見出さず、遂に守卒しゆそつを訊ただして死罪を命じ、而してユダヤよりカイザリヤに下りて留とどまれり。」(使徒12・1〜19)

ペテロはそこから脱出して、カイザリヤに下つて行つたということが書かれています。ペテロはカイザリヤの方へ行つて、大変な働きをします。

こういうところを見ましたら、我々の祈りというものが、いかに本気で祈れば聴いていただけるか。心を一つにして祈る。

「祈りたることは既に聴かれりとせよ」



と。たとえ地上でそれが成らなくても、天において聴かれています。

「祈りたることは聴かれたりという。けれど、それが地上で実現しなかったから、空しかった」

と、それは思わないでください。そういう、いわゆる現象面で聴かれる聴かれない、そんなことを突き抜けた祈りであってほしい。

私は、衡平君のためにそういう祈りをしています。私は、衡平君に私と同じようにいつまでもいてほしいと願っています。けれども、それは主さまがお決めになることであって、主さまの御手にゆだねます。けれども、

「わが願いをしつかり聴き届けて、あなたが最善となさる方法をどうぞ成就してください」

と、そういう気持ちでおります。そこを、皆さんも、

「現象面で起こらなかったから、聴かれなかった。やはり私の祈りが足りなかった。

信仰が足りなかった。」

とか、そんなふうにネガティブに考えないで、

「祈りたることは聴かれたりとせよ」

「はい、ありがとうございます」

と。あなたの祈りは全部、天に記しるされてある。それがどういう形で現象するか。これは御意にゆだねる。そういう爽さわやかな気持ちで、全託して歩んでいく。これが本当の我々、キリストに従う者の歩みだと、私は受けとっておりますので、どうぞ、皆さんも現象面に左右されないでください。

現象面で実現したら、「ああ、よかった、よかった」と有頂天になる。聴かれなかったら、ガツカリする。その繰り返しではダメなんです。聴かれたら聴かれたで、「ありがとうございます」と。しかし、現象面に顕れなくても、

「祈りたることは既に聴かれたりとせよ」

「はい、その通りでございます。あなたの書ふみに書き記しるされております」

と。もう現象には囚われれないという、そういうところへ、皆さん、突き抜けてください。そのことをお願いしておきたいと思います。

これが私これから皆さんと一緒に祈るにあたって、皆さんにお勧めする勧めということになりますので、今から30分ほど祈りの時間をいただきまして、皆さん、それぞれ大声で、周りから「うるさい！」と言われるくらいにお祈りください。お願いいたします。

始めに沈黙して、そしてまず司会者に祈りを捧げてもらって、そのあと、どなたからでも、あるいは数人が一斉に祈りだしても結構です。もう自分を見ないで、

「主よ！ 祈りを聴き給え、主よ！」

と。そういうふうには大声で叫んでください。それでは先ずは沈黙……。



……(中略)……

●正気の沙汰を越えた靈気の沙汰

皆さん、ありがとうございます。こんなのは普通の人が見たら、

「キチガイではないか!」

と思うかもしれない。やはり正常な気ではダメなんです。気が別な次元の気になって、天の気になって——それは普通の気ではありません——気がちがっているんです。

あの小池先生の夏の鹿沢での特別集会では、それはもう大きな大広間の座敷が、もう「ウワーツ」と燃え上がって、バタバタと倒れるやつとか、泡を吹いているやつとかが出てくる。それからまた、もの凄く騒がしい祈りになると、先生が

「はい、しずまつて!」

と言うと、ピシヤツと止むんですね。実にあざやかなそういう情景を私はまざまざと見えました。

ですから、おそらく、こんな今日みたいな祈りが初めてという方がたくさんいらっしゃると思う。けれども、これが祈り会なんです。人間の知的な限界を突破したところに神の働き、キリストの働きが来るんですよ。決して、私は理性を失った変てこな人間ではありません。まだ正常な人間です。そのいわゆる正常性を乗り越えて、

「天の次元、靈の次元、それを下さい! そこにひたむきに行きます!」

と。そういう捨て身的な気持ちで、自分をかぎり捨てて、ちょうど跳び込み台から跳び込むような、自分をかぎり捨てて、キリストの大海原の中へ飛び込んでいく、キリストの御腕に引き寄せられて羽ばたいていく、そういうイメージをいただきながら。

しかもそこには十字架が立っています。

「お前のすべては十字架で片づいている。お前はもう問題ない。もう全く問題ない」と。十字架の絶対性、これを必ずベースにして、

「主よ、御意を成してください。私をあなたの僕しもべとして、婢女はしためとして、お用いください。私はそのために新しく創つくり変えられました。過去の自分はいろんなことに囚われて、子どものことも気になった、いろんなことも気になった。もうそんな第一二義、三義的なことではない。あなたが第一です。どうぞ、あなたの僕しもべ、婢女はしためとして、私をお用いください」

という、そういう祈りをやっていけば、必ずキリストは、

「我は道なり、真理なり、生命なり。お前を放っておくはずがない。十字架に生命を懸けたのはお前のためだよ」

と、そう言うてください。十字架と聖霊が一つですから、そういう中で我々は祈らしていただける。これは恵みなんです。修行ではありません。恵みなんです、本当にね。さつき



「ウワーツ、ウワーツ」

と祈った。あれが特別集会の祈りなんですよ、本来。正気の沙汰ではないんです。正気の沙汰ではダメなんですわ、その限界を超えないと。時には、そういった正気しょうきの沙汰さたを越えた、天氣の沙汰になる、靈氣の沙汰になる。そんな気持ちです。私みたいな理性的な人間がそう言うんですから、ご安心になつてください。要するに、自分を超えて行くということ。その道は、

「我は道なり、真理まことなり、生命いのちなり」

と。十字架がちゃんと立っています。

「問題だらけのあなたは全部、十字架で片づいているんだよ。あとは感謝、讚美、それだけだ」

「主よ、御意を成してください」

と。マリヤさんが、天使ガブリエルに「あなたは子どもを産む」と言われた時に、

「御意を、どうぞ私に成してください。はい、御言の如くこの身に成れかし」

と言って、従順に従ったあの気持ちです。

「もう私は自分のものではありません。あなたのものです。旧い私は死にました。十字架で死にました。だから、新しい生命をあなたが下さいました。それはもうあなたのものです。あなたのご栄光のためにお用いください」

という気持ち。それがヨハネ伝の14章から16章に出てきますから、そういうところをベースにして祈る。だから、ヨハネ伝とローマ書はとても大事です。ローマ書は非常に論理的に展開しています。ヨハネ伝は深い深い霊の世界を書いています。そういうヨハネ伝とローマ書、この二つをベースにして、そして、福音書のキリストの姿を冥想して、

「ああ、イエスはこんなふう祈ってくれた。あつ、イエスさまは今、海の上を歩いて来てくれた。こつちへ近づいてきてくれた」

そういうふうなイエスさまの場面を冥想する、思い浮かべる。そして、祈るということ。

●私における神秘的体験

これを私は、ある時、祈りの中で示された。というのは、U兄弟というのが大阪召団の設立のあと、

「おれはひどいものを背負ってしまった」

と、ブロー文句を言いに来たんですよ、私に。1976年の暮れに、

「大阪召団をつくって、私は本当に後悔している」

と、私のところにぼやきに来た。

「まあそう言うな、酒でも飲んで、慰めてやるからね」

と言って、私は台所へ行ってお酒を持って上がってきたら、Uの状況が違っている。



「あつ、天が開けている。あつ、あそこにパウロさんがいる。小諸のママさんがいる。パウロさんが怒っている」

と。あの頃、U君にはものすごく上からの示しがくる。そんなことを言い出す。それで、小諸のKさんという本当に愛そのもののお方がU君のことを執り成している。

「パウロさん、そんなにU君を叱責してはダメですよ。あの子はいい子だから」と言つて執り成しているという。そんなことがあつて、それから、

「あれつ、先生の後に凄い方が立つておられる。その方が先生にしゃべりたくてしようがない。先生は全然気がついてない。だから、私が取り継ぎます」

と。それは凄いことでした。初めての経験です。あれを録音でもしたら本当に素晴らしかったのに、私はやつと断片だけを筆記しました。あとからそれをうずめようとしたけれども。でも、あれが私にとっての唯一の、いわゆる神秘的な体験でした。しかも、その翌年には私はドイツへ行くことになっていた。文部省から一年間の留学をいただいて。その時に、

「あなたはドイツへは研究に行くのではありません。研究に行ったら、あなたはお終いです。あなたは祈りに行くんです」と、ハッキリ言われた。

「あなたは日本では祈れていない。あなたは従順で御言に従っている。それはわかる。しかし、あなたは祈りができない。ドイツへは祈りに行ってきなさい」

と。それがずっと私の頭から離れなかつた、ドイツにいるあいだ。ドイツでは、素人集団の集会があつて、そこを紹介されて、公務員を退役された方が自発的に一応リーダーの役をやっている。そして、著名な方々が旅行で来ると、それを呼んで説教してもらう。私もそこで6回しゃべらされた。そんなことがあつた。私はもうドイツへは研究のためではない、祈りに行くんだという、それがずっと離れませんでしたから。そんなことがあつた。

そのU君がそうやって、
「あつ、奥田先生の後に凄い方が立つておられる。それが話したがっているのに、

先生は気づいていない」
と言つて語ってくれたのが、いや本当に断片だつたけれども、

「あなたはよく聞いている。従順であることが聞こえていることだ。あなたはよく聞いてくれている。しかし、祈りが少ないですね。ドイツへは研究に行くのではありません。祈りに行ってきなさい」

と、そういう言葉をいただいた。それからもう一つ大事なことがあつた。

「あなたは集会をするときに、一人ひとりに目で挨拶しなさい。目で一人ひとり、『イエスさま、イエスさま、イエスさま』と名前を呼びながら、一人ひとりの目を見



と言われた——私はこれを長いこと忘れていた。これからまたやります。始めはやっていましたよ、「イエスさま、イエスさま」と——そうやって口の中で、「イエスさま、イエスさま、イエスさま」といつて一人ひとりに目で挨拶する。つまり、

「一人ひとりの中に宿っておられるイエスさまに声をかけなさい。そうしたら、響きあえるんだ。そしたら、あなたの語る事が人間の言葉でなくて、聖霊の言葉となつて、その人たちの中にしみ込んでいくだろう」

という、多分そういう趣旨だろうと私は思うんですけども。そういうこともあった。だから、私における神秘的体験なんてたつた一回それだけです。でも、それは私にとつての導きの星となりました。他の人のように、神秘的なことは何も体験していない。預言も異言も何もない。にもかかわらず、私は用いられるというのは、そういうU君を通して私に對して、

「大丈夫だ、自分がついている。私が選んだのだから、お前は大丈夫だ」

という、そういうお墨付きをいただいたような気がしました。たしかに、その次のお正月の集会をやった時に、

「先生、ちがつている。今までとちがう」

と、ハッキリ集会の方々が言いました。まあ、そんなことがありましたので、ちょっとそういうことも思い出したものですから。

●神のためには狂えるなり

そうやって本当に、

「きちがいのようになって祈れ」

という、自分を突破する祈り、これが大事だということを申し上げたかった。自分の理性の限界を超えて、我を忘れて「ウワーツ」と祈る。それが何ものかではない。けれども、我を忘れて、自分を棄て去つて、本当に投げ出して祈る。

「神の前に心を注ぎいだせ」

と書いてある。それを実際にやる。それを通して、主の導きが皆さん一人ひとりにしみ込んでくる。そんな思いがいたします。私は若王子にやくおうじの山の上で大声で祈ってきた。あそこで祈っていたら、誰もじゃましないから。

私の家で祈っていた時、U君がでっかい声で祈るから、隣近所からもものすごく文句が出た。

「何時や思っているかつ！ 夜の12時やないか！」

と、両方から言われて、防音装置をした。天上も全部。窓もアルミサッシにして、音が出ないようにした。そういうことをやって来た。その祈りの場から今の召団の教会堂ができましたから、そこへ移ったんですけれども。そういうあの二階の八畳間で始まったささやかな祈りの集会を——私は40歳になる時に、小池先生に「もう一人立ちしなさい」と言わ



れて——やってきた。39歳から始まって、もう今は87歳になろうとしている、そういう歩みの中で、U君を通してそういった一つの神秘的な体験を、唯一の神秘的な体験をさせていただいた。それが私にとつてもやはり非常なバックアップになりました。

まあそんなことをちよつとこの際——始めそんなことをしゃべる気は全くなかつたけれども——こうやって「ウワーツ」とみんな祈って、この「ウワーツ」という祈りがなぜ必要かというのと、それは自分の人間的限界を超えないといけない。正気の沙汰ではダメなんだということ。

「あいつらは狂っている」

と人に言われた。パウロは、

「狂える」とく」

と自分のことを言っています。そういうふうな人間の限界を突破する。そういうことも大事だということをお皆さんにわかっていたきたい。そしてまた、京都の方は若王子山へ行つて、一緒に祈つてもいいし、本当にこの自分の限界を超えて行くような、そういう次元に突入していく。そうしたら、助けてくださいますよ、神さまの側から。やはりこつちが本気でなかつたら、向こうも本気になつてくださらないわ。キリストは十字架でご自分の生命を差し出してくださっているんですよ。そういう愛に対してこつちは何をもって報いるか。そういうことを思いますと、我々は少々、人から「あいつはちよつとおかしいぞ」と言われて、当たり前なんでしょうね。正気の沙汰ではダメなんです。

「神のためには狂えるなり」

と、パウロが言っていますよ、そういう燃えるクリスチャンになる。そういうふうな気持ちでこれからも歩んでいただきたい。これが私の皆さんへのうったえです。

それではもう時間になりましたので、これで終わりたいと思います。

